Souichirou Asano

浅野総一郎物語

～激動の日本を駆け抜けた実業家～

あさのそういちろう

Souichirou Asano

目 次

1 浅野総一郎の人生・経歴

2 浅野総一郎の富山における功績

3 小牧ダムと浅野総一郎

4 浅野総一郎 経歴

5 浅野総一郎 経歴

6 浅野総一郎 経歴

7 浅野総一郎の経歴と「DNA」

8 翁顕彰

9 越中人たちの足跡

10 庄川流木事件

11 庄川という名の由来

12 庄川の移り変り

13 牛嶽車道開通記念碑

14 (新)夢を叶えたもの

15 南砺用水

16 南砺用水

Souichirou Asano

◆激動の日本を駆け抜けた越中氷見出身の実業家

浅野総一郎

1 浅野総一郎の人生・経歴

1 浅野総一郎は、嘉永元年（1848年）3月10日、富山県氷見海岸藪田村の医師「浅野泰順」の長男として生まれた。
◆総一郎は、医師になることを嫌い商業を好み、15歳で縮機（ちぢみばた）と呼ばれる織物の生産と販売を初めての起業とした。
◆しかし、醤油の製造にも手を広げたため、資金難に陥り、両方とも失敗した。ここで最初の挫折を味わうことになる。

2 次に思い立ったのは、江戸末期においては革命的な農機具である「稲扱き機」（稲こっき）の仕入と貸し出しである。
◆親類縁者から250両もの大金集め、仕入れ先の因幡に向う途中、京都に立ち寄った際に「坂本龍馬」に出会う。
◆龍馬と話す機会を得て、奮起した総一郎は、「稲扱き機」を仕入れたものの、その年は、大区作となったため失敗に終わる。

3 24歳の初夏に、借金を抱えながらも上京し、御茶ノ水で砂糖を入れた冷水を売る「冷やっこい屋」を起こして儲ける。元手のいらない商いで、夏の終わりには12円が手元に残った。

4 次に、農家で捨てていた竹の皮を包み容器として売買。

5 ある程度の生活が可能になって「サク」と出会い、お互いに運命を感じ二人は結婚をする。

6 働き者のサクとともに、薪や炭、石炭へと事業をみるみる拡大していく。

7 「廃品利用の天才」と呼ばれた。
◆ガス局で処分に困っていたコークスを再燃料化した。また、コールタールを当時流行していたコレラの消毒液として再利用するなど、「廃品利用の天才」と呼ばれた。

8 その後、第一国立銀行頭取で「抄社会社（後の王子製紙株式会社）」社長であった渋沢栄一と出会う。

9 明治時代の怪物とも言われた「安田善次郎」と同じ越中富山出身で、青雲の志を抱いて上京したことも共通していた。

10 「安田財閥の祖」である「安田善次郎」と出会う。

11 この二人（「渋沢栄一」「安田善次郎」）は、浅野総一郎の実業家としての度胸と手腕に惚れ込み、惜しみない支援をする。

12 明治16年（1883年）には、赤字で休業中の官営深川セメント工場を買収し、一心不乱に働く。一代で「浅野財閥」を築いた。

13 大成功のうえ、年産1000万樽の大会社に発展する。これが「浅野セメント」である。

14 昭和3年（1928年）京浜工業地帯完成。「京浜工業地帯の父」と称された。

15 昭和5年（1930年）82歳で死去。

※浅野総一郎の銅像「九転十起の像」が平成20年（2008年）生誕160年を記念して氷見市内に設立される。

2 浅野総一郎の富山における功績

1 「**庄**川水力電気株式会社」を創立し、発電県・富山の基礎づくりをした。

2 **庄**川に東洋一の「小牧ダム」を築いた。

3 **高**峰譲吉、安田善次郎らと共に、婦中町に化学工場（現：日産化学工業）を誘致し、農業県から工業県へと脱皮する先駆けを開いた。

4 **県**の財政難により廃校の危機に面していた「富山商船学校（国立富山商船高専）」に巨額の寄付をした。

◆「記念碑」は高専の敷地内にある。

3 浅野総一郎が日本で初めて行った主な事業

1 **”会**社組織”をつくる

2 **産**業におけるコークスの燃料化に成功

3 **北**海道炭販売の15年契約を結ぶ

4 **外**国蒸気船購入で海運業を起こした民間人・東洋汽船創設者（明治29年）

5 **皇**居に国産のセメントを納入

6 **タ**ンク油を大々的に販売

7 **ロ**シアとの民間外交にかかわった事業家

8 **昼**夜兼業の銀行をつくる

9 **横**浜市の鶴見沖に大規模埋立地を造成

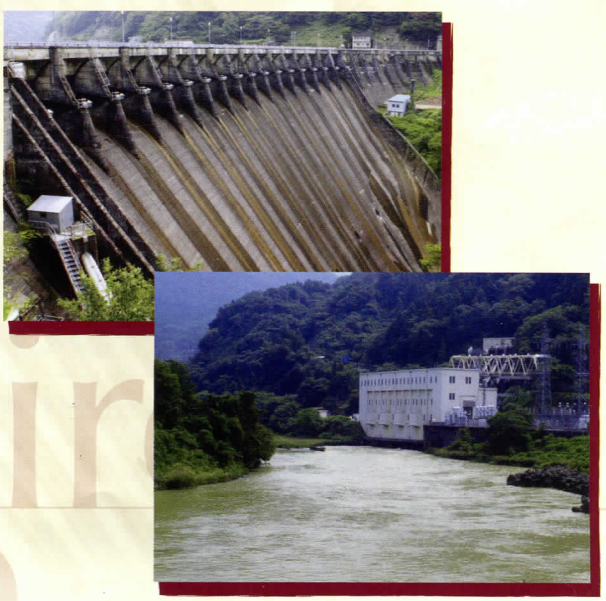
10 **庄**川に東洋一の「小牧ダム」を築く

4 浅野総一郎の事業総覧

1 **直**接の支配会社は、約30社、傍系会社は約50社に及んだ。

2 **船**舶、製鉄、埋め立て事業など意欲的に拡大し、特記すべき点として、

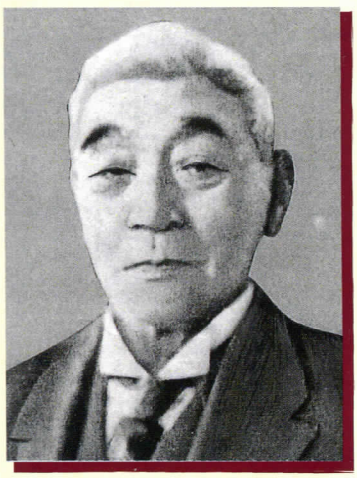
◆横浜市鶴見区から川崎市にかけての大工業地帯は、浅野総一郎の埋め立て工事のお陰で出来たなど、近代日本の礎を築き上げた実業家である。



◆歴史資料

小牧ダムと浅野総一郎

1 小牧ダムを築いた浅野総一郎



あさのそういちろう
◆浅野総一郎◆

浅野総一郎は、氷見市に生まれた実業家で、セメント製造や東洋汽船会社をつくり、各種事業を幅広く広げました。

浅野総一郎は、郷土の産業発展のために必要なのは「電源開発」だと考えました。

そこで庄川に注目し「庄川水力電気株式会社」を設立しました。

大正6年（1917年）部下と一緒に調査に訪れたとき、庄川の流れを見て、「**おお、黄金の水が流れている**」と絶句して、喜んだというエピソードがある。

翌、大正7年（1918年）富山県に許可を申請し、ダム建設工事に入りました。

昭和5年（1930年）浅野総一郎の大きな力によって、小牧ダムが完成したのです。

2 小牧ダムの建設

小牧ダムの建設は、氷見市出身の「浅野総一郎」の電源開発計画によってはじまりました。

小牧ダムの建設によって、付近の道路が整備されたり、鉄道が完備されたりして、人々の暮らしにとても役立ちました。

しかし、飛騨地方で切り出した木材を庄川に流して、運んでいた木材業者は、仕事の場を奪われることになり、大変な争いが起こりました。解決には長い年月を要しましたが、昭和5年（1930年）に、小牧ダムが完成いたしました。

小牧ダムの規模

高さ80m
最大出力7万2000kw

計画から15年、着工から5年延べ100万人の人手をかけ、東洋一の高さであった。

（資料提供：国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所）

◆庄川 小牧ダムの建設に携わった 浅野総一郎の 経歴

主な出来事

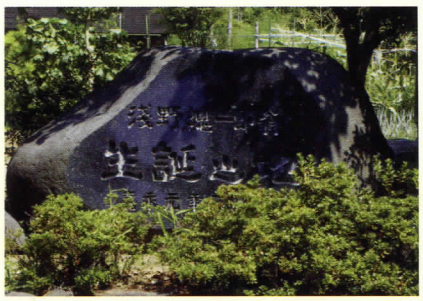
嘉永元年 1848	誕生	3月10日氷見郡藪田村に生まれる。幼名は泰治郎。父は医者で、歳の離れた姉がいて、その時既に養子を貰い医者の稼業を継いだ。
嘉永7年 1854	6歳	父の妹が嫁ぎ、氷見一番の町医者「宮崎南貞」の養子となる。 医者になる為の講義を受ける泰治郎は、医者の必読書である「傷寒論」をわずか3ヶ月で暗唱し養父を驚かせた。
文久元年 1861	14歳	泰治郎は、13歳の時から養父の代診を勤めるが、翌年大流行したコレラに太刀打ちできず、無力感を感じて、医師は自分の道とは違うと悟り、実家へ逃げ帰った。
文久2年 1862	15歳	初めて起業、縮みばたの織物の生産と販売を行うが、軌道に乗り始めたところで、醤油の製造に手を広げ、資金難に陥り失敗する。
元治元年 1864	17歳	親類縁者から250両を集め、稲扱き機（江戸末期では革命的な農機具であった）を仕入れ、農家に貸付けを行ったが、凶作の為失敗し、100両の損失を出した。
慶応3年 1867	20歳	産物会社（現在の株式会社）を立ち上げるが、手を広げすぎて最終的には失敗。
明治4年 1871	24歳	友人の出資を得て、浅野筵商店を始めたが、拡大し過ぎてまたもや失敗し上京して再出発する。 初夏に、御茶ノ水で砂糖入りの冷水を売り儲ける。
明治5年 1872	25歳	農家が捨てた竹の皮を仕入れ、包み容器として販売。 このころ生涯の良き伴侶「サク」と出会って結婚。 横浜で、薪炭販売、翌年には石炭も扱って、商売が軌道に乗り始める。

あさの そういちろう
◆浅野総一郎◆

◆浅野サク◆

主な出来事

明治8年 1875	28歳	近所の火災により自宅が全焼する。3万円(現在の3億円)の財産を失う。
明治9年 1876	29歳	横浜市ガス局で廃棄に困っていたコークスを再燃料化し、コールタールも当時流行していたコレラの消毒液として、再利用するなど富を得る。「廃品利用の天才」と呼ばれた。
明治12年 1879	32歳	横浜市内63箇所に日本初の西洋式公衆便所を建設する。
明治14年 1881	34歳	民間として初めての官営深川セメント工場の貸下を受ける。
明治16年 1883	36歳	セメント工場の正式払下を受け正式な経営者となる。
明治21年 1888	41歳	大倉喜八郎、渋沢栄一とともに、民営「サッポロビール」の創設に参加する。
明治23年 1890	43歳	帝国ホテルの創設に参与。 福岡県門司の埋め立て事業を開始する。
明治26年 1893	46歳	「浅野石油部」創設。外国より石油を輸入し、タンクで石油を販売し利益を得る。
明治29年 1896	49歳	安田善次郎など実業家の協力を得て、「東洋汽船株式会社」を設立する。 ・渡米し、横浜とサンフランシスコ間に東洋汽船の船3隻を走らせる契約をする。 ・また、その足で、船舶注文のため渡英し、当時世界一と言われた豪華客船「日本丸」、「アメリカ丸」、「香港丸」を発注する。
明治39年 1906	59歳	大倉喜八郎らと「東西石油会社」を創設する。
大正元年 1912	65歳	横浜市鶴見埋立組合を組織し、埋め立ての着工を始める。



◆「生誕の地」記念碑

◆総一郎生誕125年記念碑

主な出来事

大正3年 1914	67歳	横浜市鶴見埋築株式会社(現:東亜建設工業株式会社)創立。
大正5年 1916	69歳	「浅野造船所」(元:日本鋼管、現:JFEスチール)創立・鶴見埋立地に鶴見臨港鉄道(現:鶴見線)を創設。 庄川の開発に着目し実地調査を行う。
大正7年 1918	70歳	小牧ダム建設工事着工。
大正8年 1919	71歳	故郷の富山県に「庄川水力電気株式会社」を創立。
大正9年 1920	72歳	人材育成の為、「浅野総合中学校」 (現:浅野学園)を設立。 その校訓を「九転十起」とする。 ◆南部鉄道(現南部線)の鉄道敷設を実現。 ◆五日市線、青梅線の敷設にも貢献する。
昭和3年 1928	80歳	鶴見埋立事業完成。 「浅野セメント・日本鋼管・浅野製鉄所・旭硝子・日清製粉・日産自動車」等に進出。 ◆京浜工業地帯を完成させる。 ◆群馬県に佐久ダム、発電所を建設する。
昭和4年 1929	81歳	「浅野工業専門学校」を設立。
昭和5年 1930	82歳	11月9日、生涯を閉じる。小牧ダム完成。
平成20年 2008		7月20日、「浅野総一郎」の生誕160年を記念して、「九転十起の像」を建設・除幕。氷見市藪田児童公園に建立。

◆総一郎生誕160年記念碑
「九転十起」の像

息を引き取った1週間後、当時、東洋一と言われた
「小牧ダム」が完成し、発電を開始した。

【資料提供:富山新聞H20.7.20】

Soichirou Asano

◆越中と東京の架け橋

浅野総一郎の経歴と「DNA」

1 浅野総一郎の経歴と「富山県人気質」・DNA

浅野総一郎の幼名は「泰治郎」といい、

氷見郡藪田の村医者の長男として生まれた。その時代は幕末で、ペリー来航の頃（嘉永6年1853年）は、もうすでに6歳であった。

浅野総一郎は、氏子総代をも務める家柄に生まれたが、姉夫婦に家督を譲るため、また父が病で倒れたこともあり、氷見の町医者「宮崎家」の養子となる。

ところが「現状を不満に思う」というDNAのせいで、「泰治郎」は、強制される勉学には反発しか感ぜず、幼心に描いたのは、当時人々の間で騒がれていた「銭屋五兵衛」のように、大海原で千石船を走らせる大商人となることであった。そして、夢に向かって突き進むのである。

15歳で実家に帰り、少年実業家として始めたのが「麻織物業」であった。

藍を仕入れ、藍染に仕上げ、自宅の裏山を切り開き、女工さん達に出来上がった反物の行商にも出た。

この仕事は軌道に乗るが、しかし「尽きぬことのない好奇心」というDNAのせいで、つぎは「醤油製造」に走る。しかし、うまく行かず、16歳の挫折を味わうのである。

他人には理解しがたい、早い廃業決断であったが、それには理由があった。

> ・自ら実務を手掛け、直観的に現状を見直し、合わないとなれば、同じことを繰り返すだけに興味を感じなくなる。
> ・これこそは**「富山県人気質」のDNAの「分析力」**であった。

明治9年頃（1876年～）、総一郎は当時の財界人・渋沢栄一を知り、心を掴まれた。

セメント業へ乗り出す
この時、仕切りに紡績業への参与を求められるが、浅野は断るのである。
それは、少年時代に手掛けているので、興味が湧かなかったのである。

それに比べ、セメント業ならば、きっと黒字にする確固たる自信があった。

もう一つ、未知・未解決の部分が多く、男の仕事として、興味を感じたこともあったのである。

その他、「稲扱き機」の賃貸し事業も手掛けた。成功もあり失敗もあり、まさに「九転十起」の男であった。

このように総一郎は、尽きせぬ興味の追求という「DNA」のため、総一郎の心に深く根ざす海への憧れのため、幾つもの冒険を重ねていくのである。

◆首都・東京の発展を支えた

浅野総一郎

翁顕彰（おきなけんしょう）

浅野総一郎は、嘉永元年（1848年）富山県氷見市に生まれ、明治4年（1871年）青雲の志を立てて上京し、苦難の末、セメント、製鉄、造船、海運、炭鉱、水力発電、海岸埋め立て、貿易等の我国産業の進展に多大な貢献をされた偉大な実業家であった。

生涯を通し「勤倹力行」を信条とされ、特に近代日本の工業発展のため、水力発電の重大性を痛感され、大正5年（1916年）庄川の開発に着目され、数度にわたる実地踏査の上、大正8年（1919年）に、庄川水力電気株式会社を創立された。

そして、庄川町小牧地内で、東洋一の規模を誇る大堰堤を構築する「小牧発電所」計画に着手した。大正14年（1925年）着工、幾多の困難を克服して、遂に、昭和5年（1930年）世紀の大事業である「小牧堰堤」が完成したのである。

その結果、最大出力72.000kwの発電が開始されたのである。

この事業の遂行により、工業の発展は、もとより、潅漑、治水、文化、観光等に与えた影響は、はかり知れず、その恩恵は無限であった。

さらに、戦後に至っては、和田川総合開発につながり、我が富山県の発展に画期的大事業になっていったのである。

今ここに、庄川町水記念公園完工にあたり、翁の先見性ある功績を讃えその遺徳を永久に顕彰する。

平成2年7月27日　浅野総一郎翁顕彰会

◆首都・東京の発展を支えた越中人たちの足跡

1 旧安田庭園（墨田区横綱）

Zenzirou Yasuda

安田善次郎

（富山市出身）

「安田善次郎」氏が所有していた庭園である。

この庭園は、元禄年間（1688～1698年）下野国、足利二万石の領主本庄因幡守宗資（ほんじょう　いんばのかみむねすけ）が造った庭で、隅田川の水の干満を利用した庭園で、「潮入り回遊式庭園」として、江戸の名園であった。

後に、岡山藩主・池田氏の邸宅地になったが、明治24年（1891年）に安田氏の所有となった。

安田氏死後の大正11年（1922年）に旧東京市に寄贈され、一般に開放されるようになったのである。

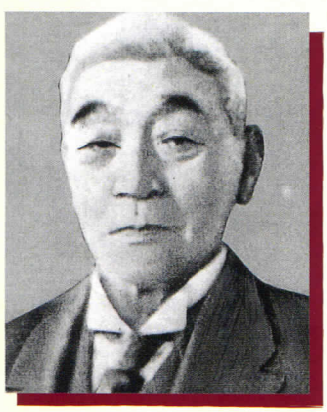
庭園の北側には、安田氏が創立した「安田学園」や両国公会堂がある。また、東京大学の「安田講堂」や日比谷公会堂も安田氏の寄贈によるものである。

2 セメント工業発祥の地（江東区清登）

Souichirou Asano

浅野総一郎

（氷見市出身）



江東区の清澄庭園の隣に「本邦セメント工業発祥の地」と書かれた碑と「浅野総一郎」の銅像が建てられている。

「浅野総一郎」は「明治のセメント王」と呼ばれ、京浜工業地帯の礎を築いた人物である。

この地は、浅野氏が官営のセメント工場の払い下げを受け後の「浅野セメント」（現太平洋セメント）を民間セメント工場として発展させた場所である。浅野氏は「浅野セメント」設立後、海運、造船など各種事業を手掛け「渋沢栄一氏」や「安田善次郎」の協力のもと、一代で浅野財閥を築いたのである。

3 ホテルニューオータニ（千代田区紀尾井町）

Yonetarou Otani

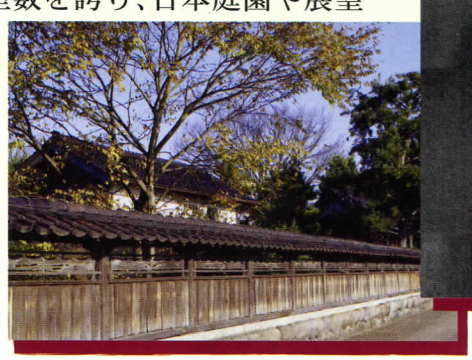
大谷米太郎

（小矢部市出身）

このホテルの創業者は、「大谷米太郎」氏である。大谷氏は、貧しい農家に生まれ、31歳で上京し荷揚げや力士などを経て、町工場を経営する。その後、製鉄会社を設立し事業の拡大を図り「鉄鋼王」と呼ばれるまでになった。

ところが、敗戦で事業が大きな打撃を受けたが、五輪で来日する外国人観光客の宿泊のため、80歳を過ぎていたが新たにホテル事業に乗り出した。

完成した超高層ホテルは、当時日本一の客室数を誇り、日本庭園や展望レストランを備え、帝国ホテル、ホテルオークラと並ぶ業界の「御三家」といわれた。



◆歴史資料

暮らしを支えた庄川の流木と庄川流木事件

「浅野総一郎」と「小牧ダム」の建設

大正5年(1916年)富山県氷見市藪田出身の実業家「浅野総一郎」が、庄川の豊かな水を発電に生かすため、庄川水利権を国に願い出ました。

アメリカの会社に調査を依頼するなど準備を進め、小牧ダム建設の計画を立てました。

■木材業者の反対運動[資料-20]

大正8年(1919年)県がこの大計画を認めて発表されると、庄川流域の住民や農民、漁民などに大きなショックを与えました。

中でも、木材業者たちは、ダムが出来ると木材を流すことができなくなり、大きな損害をこうむると反対運動を起こしました。

やがて、反対運動は、電力側を相手に裁判へと発展してしまいます。

どちらも庄川の使用権をめぐり、約8年間にわたって、法廷で争いました。その結果、木材運送の権利が認められ、それを侵害した電力側に賠償金を支払うよう判決が下りた。

ダム建設とともに、木材は陸路で輸送されるようになり、庄川に流木の風景が見られなくなりました。

■木呂川流し作業「川狩り」利賀川と庄川本流の合流地点仙納原付近（大正末期）

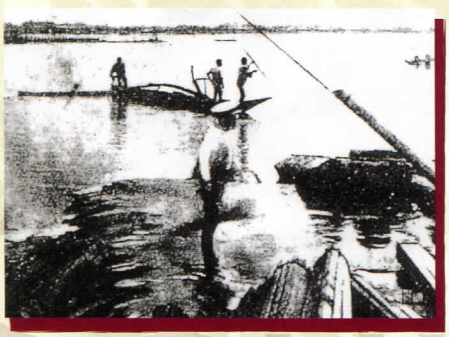
加賀藩は、城下町を築くため、多くの木材を必要としました。しかし、遠くから運ぶと多くの費用がかかるため、出来るだけ近い産地から買い求めなければなりません。

五箇山や飛騨は、交通の不便な所でしたが、豊かな木材が残っていました。

加賀藩は、ここからヒノキやケヤキなど木材を買い求め、「川下げ」と呼ばれる輸送方法で、下流まで運びました。

木材の「川流し」をする職人を「流送夫」と呼んでいました。

（資料提供:庄川町史より）



■流送夫

■貯木場

（資料提供:庄川町史より）

Soichiro Asano

◆歴史資料

庄川という名の由来

「庄川」は、川筋が変わるたびに、呼び名も変わってきました。
現在の呼び名の「庄川」は、雄神神社に由来しているといわれています。
かつて、雄神神社の周りの地域を「雄神の庄」と呼んでいましたが、その間を流れていたため、「雄神庄川」と呼ばれていました。
その後に、「雄神」の名がとれて「庄川」が残り現在に至ったという。

雄神川（おがみがわ）　紅（くれない）にほふ　少女（おとめ）らし
あしつき取（と）ると　瀬（せ）に立（た）たすらし

万葉集：天平20年（748年）　大伴家持

奈良時代の庄川は、現在の庄川町金屋から北西に向かって流れ、小矢部川に合流していた。

天正13年（1585年）11月、砺波平野から岐阜県北西部にかけての大地震が起こり、庄川の様相は一変した。
金屋岩黒地内で山崩れが発生し、土砂で庄川が堰き止められ、20日程後に満水となった川水が流れ出し「弁財天社」の所で二つに分かれ、一つはもとの千保川へ、もう一つは「弁財天社」の東側へ入り、新しい流れを作ったのである。

この東側への流れが、後の「庄川本流」となるのである。

◆歴史資料

庄川の移り変り

～砺波平野の変遷～

1 砺波平野を流れていた川

奈良時代の庄川は、現在の庄川町金屋から北西に向かって流れ、小矢部川に合流していました。

その昔、上流を「雄神川」（おがみがわ）、合流地点の下流を「射水川」（いみずがわ）と呼んでいました。

洪水が起こる度に、野尻川から中村川、荒俣川、千保川へと大きな川の流れが西から東へと移動して行ったのです。

2 流れを変えた大地震（越中大地震）

戦国時代の終わり頃、庄川は現在の舟戸口用水の辺りを流れていた千保川（せんぼがわ）を主流としていました。

しかし、天正13年（1585年）に起こった大地震（越中大地震）で流れが変わり、弁財天社の所で水流が二つに分かれ、一方は当時の主流であった千保川へ、もう一方は中田川へ流れ込み新しい川筋をつくりました。

3 庄川の誕生

天正13年（1585年）の大地震の後も度々洪水が起こり主流は千保川へ流れ込みました。

そこで、千保川の下流にある加賀藩の菩提寺である高岡瑞龍寺を洪水から守ろうと、加賀藩の命令により現在の庄川へと流れをまとめる工事が進められるのです。

この流れをまとめる工事を「柳瀬普請（やなぜふしん）、松川除（まつかわよけ）」と言われ、庄川としてまとめたのです。

■昔の庄川の川筋のあと。小矢部川の支流にはかつて庄川の本流が流れていた。

■資料提供
国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所より

◆砺波の歴史

砺波市指定文化財
牛嶽車道開通記念碑

この記念碑は、明治23年（1890年）9月13日、「牛嶽車道」全線開通を記念して「牛嶽運送株式会社」が建立したものである。

砺波市庄川町金屋　指定月日：平成6年

1 「牛嶽車道」とは

「牛嶽車道」は、牛嶽山麓の利賀谷高沼（現南砺市利賀）から庄川金屋まで、石灰を輸送するため、地元有志が私設した新道であり、15年間の期間は、利用料を取ることが許可された賃取り道であった。

開通時には、森山茂知事（第三代知事）が祝辞を寄せている。

牛嶽南側一帯の山地、高沼から婦負郡山田村深道近辺は、通称「石灰山」といわれ藩政期末から石灰岩の鉱床として知られていた。

しかし、山が深く道が狭いため採掘後の輸送には人の背に頼る他ありませんでした。

ところが、明治期に入ってからは、稲作の肥料として石灰の需要が増大し、荷車による搬送可能な道路が必要となり、「牛嶽車道」が実現したのです。

2 記念碑の碑文

自然石（凝灰石）に刻まれた碑文は、浄土真宗大谷派の僧侶で金沢市の「北方蒙」（号心泉）の作句、揮毫による。

心泉は、明治期、布教僧として幾度となく中国へ赴き、法務の傍ら金石学を研究し、我が国に北魏の書風を伝えた最も初期の書家で、絵画、書文の才能もあり、篆書をよくした。

碑面には、「山を塹り、谷を埋ぐ牛嶽か、平五箇に多く産す、来たり貿いて便りを得、中越の富、源泉尽きず」とある。

この記念碑は、国道156号線から関西電力（株）小牧発電所に通ずる坂道を下り、約100mに位置し、わずかに往時を偲ばせている。

■銘文

塹山埋谷牛嶺孚
平五箇多産来賀
得便中越之富不
竭源泉

明治廿三年九月
加賀　北方　蒙題

浅野総一郎の夢を叶えたもの

「夢を掴んだ黄金の左手」

この左手は、浅野総一郎翁が、事業を起こしては失敗・挫折を繰り返しながらも、度胸・努力・勤勉を座右の銘として自分の人生の夢を掴むことに邁進（まいしん）した結果、この手で、自分の夢を掴みました。

あなたも、浅野翁に肖（あやか）り、この左手に触れ、あなたの夢を掴んでください。

「夢が叶う黒石・白石」

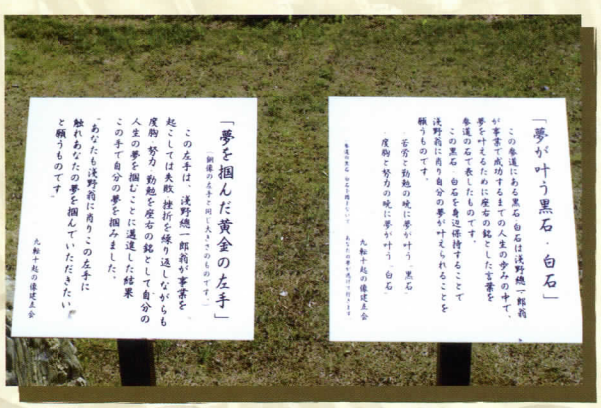
この銅像の参道にある「黒石・白石」は、浅野総一郎翁が事業で成功するまでの、人生の歩みの中での夢を叶えるために、座右の銘とした言葉を、参道の石で表したものです。

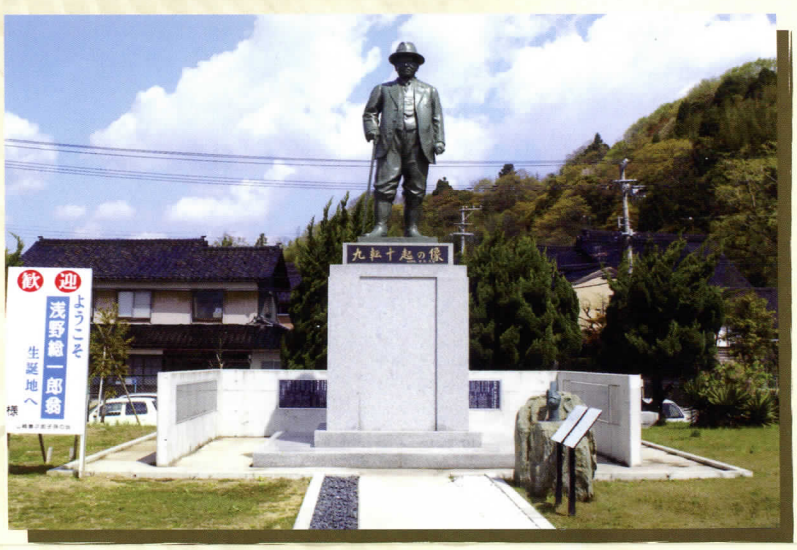
この「黒石・白石」を、自分の身も周りで保持することで、浅野翁に肖り、自分の夢が叶えられることを願うものです。

苦労と勤勉の暁に夢が叶う……“黒石”

度胸と努力の暁に夢が叶う……“白石”

（参道のこの石を踏むとあなたの夢が逃げていきます）





この現物は、氷見市藪田の記念公園にあります（資料提供:九転十起の像建立会資料）

Source Asano

水六訓

平成20年11月吉日
日本船舶振興会 会長 笹川良一

1 あらゆる生物に生命力を与えるは、水なり。

2 常に自己の進路を求めてやまざるは水なり。

3 如何なる障害をも克服する勇猛心と、よく方円の器に従う和合性とを兼ね備えるは、水なり。

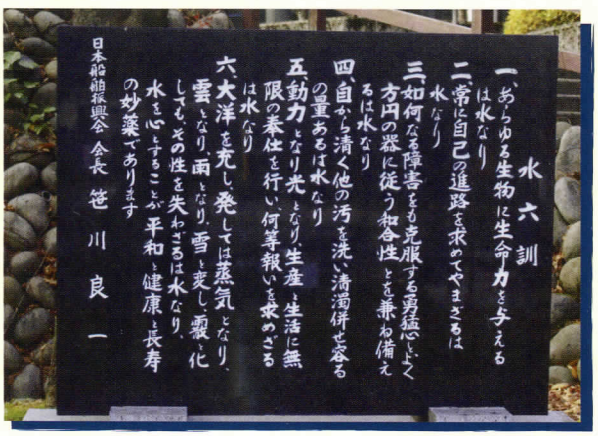
4 自ら清く他の汚を洗い、清濁併せ容るの量あるは、水なり。

5 動力となり、光となり、生産と生活に無限の奉仕を行い、何等報いを求めざるは、水なり。

6 大洋を充し、発しては蒸気となり、雲となり、雨となり、雪と変し、霧と化しても、その性を失わざるは、水なり。

－水を心とすることが、平和と健康と長寿の妙薬であります－

「日本船舶振興会　会長　笹川 良一」



■資料：庄川美術館正面の記念碑より

◆砺波の用水

～南砺の里山を豊かな田園地帯に変えた～

南砺用水

南砺市（井波・井口・城端、砺波平野の南東部、八乙女山や高清水山など）の山麓地帯では、農業用水が山々からの小さな渓流のみで、安定した補給水源の確保は、農民の長年の悲願であった。

南砺用水は、昭和30年代（1955～1964年）の御母衣ダムの築造、和田川、小矢部川の総合開発計画をきっかけに、山麓一帯の用水不足解消の動きが強まり、昭和40年（1965年）から工事に取り掛かり、昭和48年（1973年）、多くの山や谷を貫き、水路トンネル・サイフォン・水路橋等が数多くある総延長12.9kmの南砺用水が完成したのである。

1 干ばつに苦しんだ日々

砺波平野の南部にそびえる八乙女山、赤祖父山、高清水山等の麓に広がる田園地帯の農業用水は、山々から流れでる小さな川だけであった。

上流には「水源涵養林」として、ブナの原生林が広がり、村人たちは上手に水を使っていました。

しかし、日照りが続くと、夏は渓流も細くなり稲が枯れてしまいました。

このため、用水の配分を巡る水争いは絶えず、農民はとても苦労してきました。

明治の始め頃、庄川の支流から水を引く計画があった他、昭和11年（1936年）に、旧庄川町金屋地区を潤す金屋用水ができて、庄川の水を引くという夢は一部だけ実現した。しかし、その下流である井波・井口・城端地区の山麓地域に水を引く計画については、経費、地形や地質、水利権などの問題から、長期間実現することもなく農民の苦労は、ずっと続いていたのです。

2 先人の夢が実現 昭和48年（1973年）

昭和36年（1961年）庄川御母衣ダムの完成によって、庄川の流量が安定したことにより、富山県は小牧ダムから庄川の水を旧井波町・旧井口村・旧城端町へ引く用水計画案を作った。

何度も話し合いを重ねた結果、新たな水を流す権利をこの地域の窮状を理解した「二万石用水・新用水・山見八ケ用水」等から、割愛することに決まり、水利権のメドがついたので悲願であった待望の工事が始まったのである。

◆「円筒分水槽」（井口、赤祖父）

南砺用水路は、昭和40年（1965年）に着工し9年の歳月をかけて昭和48年（1973年）に完成した。

当初は、最大流量も毎秒2.0m³であったが、平成5年（1993年）には、毎秒2.4m³に増え、ポンプアップの必要のあった山見八ケ用水分の水も流すことになったのである。

◆東大谷水路橋

3 地域の大切な用水として

「南砺用水路」は、もともとあった渓流用水に庄川の水を補給するものである。

戦後に行われた圃場整備によって、田んぼは大きくなり、兼業農家が増加したことにより、農作業も土曜日や日曜日に集中してきた。また、大切な水は、無駄なく合理的に利用するため、井波・井口村・城端地区には幾つもの「ファームポンド」という現代の溜め池が幾つも作られた。

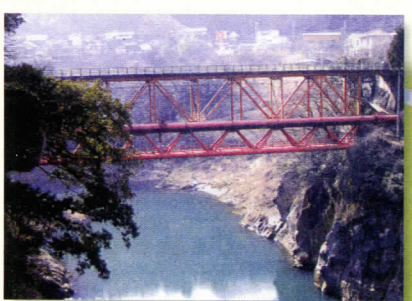
砺波平野の南部では、渓流の水や南砺用水からの水を「ファームポンド」に溜めて、無駄な水を流さず、地下に埋めたパイプラインから各田んぼに必要な時だけ、バルブを開けて、水を流す仕組みが、網の目のように張り巡らされています。

4 ファームポンドとは

時間毎の水の利用が調節できるように、農業用水をいったん貯留するための施設である。

5 水利権とは

水を河川や湖沼などから取水して使用する権利で、河川管理者の許可を受けた「許可水利権」と法律ができる前から取水していた「慣行水利権」がある。



■資料提供「ふるさと夢とやま」NO.23
富山県農林水産部企画課・農村環境課

Souichirou Asano

となみ野田園空間博物館推進協議会